

# 代償

石川 友也

そのジャケットを下ライクリーニング後、乾燥機からハンガーに吊るしたとき異状に気付き再び手に触れてみました。確かに元の風合いが無くなっています。全体が固められしなやかさが伝わってきません。「まさか！」胸の動悸が激しくなっていることに気付きました。紛れもなく洗いを間違えて異変を起こしてしまっています。

「迂闊だった！ 表示を確かめればよかった」

先入観がうらめしい。経験上どう見てもその方法を用いるのに疑いはなかったのです。

しかし最近の品物には見た目で判断してはいけないものがあります。このジャケットの依頼主はMさんでした。既に何年も当店を利用いただいているのです。信頼もしていただいております。それはMさんの変わらぬ仕種で判ります。釣銭などは受け取らない方が多いのです。だからと言って我がままな要求や無理なことは一切押し付けることはありませんでした。人情として夫婦は細心の注意を以て気合を入れて仕事をさせてもらっております。信頼を

裏切る結果をもたらしてしまったのです。しくじるときにはどこかに隙があります。時間的には一瞬のできごとなのです。主人は悩みました。当たりまえです。他人様の品物に異状をきたして平気でいられません。どのように話を切りだしお詫びしようかと。弁償は当然ですがお客様の衝撃を最小限にとどめなければいけないのです。品物は大抵同じ物はありません。気に入って求めたものです。そのところが唯物的に代替できないところです。だがもう一方で別な観念が頭を持ち上げたのです。Mさんという方は大変雅量の広い寛大な精神の持ち主です。例えば客が三、四人待っていたとして、自分の番なのに最後に回るので。また持ち帰りの荷物が多いたとき丁度車が前にあったので「お持ちします」と言っても決して甘んじない芯の強さを見せます。二度往復しても自分で処理します。そのようなとき身に付ける宝飾の類は見たことがあります。心の中にある宝石がキラッと光り輝くのです。着る物一つで人間性を豹変させるようなことはない。代価で許していただきたいし、そうなるだろうという考えに傾いていったのです。Mさんが来店したら率直に話そうと心に決めたのです。そしてその日がやってきたのです。他の品物と一緒にジャケットを引き取りに見えたのです。主人は腹を括り打ち明けました。「実はジャケットをしくじってしまった。元に戻りません、弁償させて下さい」

「ええっ！」驚きの声には衝撃を受けたときの破壊的な力がありました。「ああ！」と小さく嘆きに似た叫びを叫びました。変わり果てたジャケットを前にして悲し気な顔をしたのです。

主人はいささか虚を突かれ慌てました。予想もしていないMさんの表情に言い訳がましいことは言えませんでした。「本当に申し訳ありません」と深く頭を下げるしかなかったのです。Mさんの人柄を考えたときジャケット一枚でこんなに表情を崩されるとは予想外でした。

主人は自分に都合の良い考えをしていたことに後悔しました。「私」と言って数秒の沈黙の後、「私たちの結婚30年記念日に主人が買ってくれたのです。主人が病気になるつととき、このジャケットを着て毎日主人の入院している病院に通つたのです。そのときの憶い出が詰っているんです」予想だにしない言葉が発したのです。Mさんの目頭がうるんでおりました。「ああっ」と今度は主人が叫んでしまいました。後にご主人は帰らぬ人となつてしまったのです。ジャケットばかりでなく思い出まで傷付けてしまったことに心底辛かったです。「あれは可成り着ましたから心配しないで下さい」と言うと着られなくなったジャケットを持って帰ってゆきました。

その言葉遣いにはいつものMさんに近い響きがありました。辛い衝撃を沈めて何かを悟つたときの安寧が漂つてい

ると思われました。

「さて、どうしたらよいものか」Mさんはあのように言われたけれど、このいま良い考えなど浮かぶ訳もなく、しばらくして落ち着いたところで決めることにしたのでした。

その結果、Mさんは現金は受け取るまい。それに見合う商品券を有名デパートで求めました。何が入っているかわらない小さな箱を携えてMさんを訪ねました。「このままでは気が収まりません。商売している以上、責任があります。私の気持ちも解つて下さい」Mさんは快く受け取ってくれたのです。

「随分、悩んだでしょう。何も言わずにお願いした私の方に非があるのです。もうそんなに心配しないでね。これからも死ぬまでお世話になるんですから」反対に慰められてしまいました。「でもよかったです。充分ではないかも知れませんが受け取っていただけだ」主人は涙をうるませながら後にしたのでした。

それから数日が経つた或る日のこと、Mさんが店に来られました。「これとても受け取れません。こんなことしないで下さい。つい主人のことなど話したばつかりに余計なご心配かけてしまったのね」主人はまた少し悩まなければなりません。なぜってMさんという人を真に理解に及んでいなかったことを。Mさんはきっぱりとあのジャケットに決別していったのだった。